



十畳のロフトは、ひとりで暮らすには広すぎた。

家よりも病院にいる時間のほうがどんどん長くなっている。  
一時帰宅するたび殉は、少しずつだが体力の低下を感じるようになってきていた。

だだっ広い部屋に置かれた大型水槽。  
その中にいる数匹の金魚達が殉の姿を見つけて水面まであがってきた。  
手さぐりで袋を取り、僅かに傾けて少量の餌を蒔く。入れ過ぎは水質を悪化させるので厳禁だった。  
入院中は大家さんに面倒を見てもらっているのだから、殉は水槽の汚れには人一倍敏感だった。

手を差し込み、ガラスをなぞって苔の状態を測ってみる。  
金魚達が甘えるように殉の指をつついた。  
ふっと殉が微笑む。

おまえたちが元気だと、僕もうれしいよ

今、水槽に居るのはもう三世代目の魚達だった。

この子達が星になる頃、僕はまだここにいられるだろうか…

机の上から鍵をとり上げると、薄手のニットを着て殉は部屋を後にした。

◇

港に面した公園はすっかり闇の底に沈んでいた。  
地元では有名な観光スポットだが、平日という事もあり、人影はアベックがまばらに居る程度であった。  
殉は杖をつきながら、今は碇を降ろして海上ホテルとなった客船の前までゆっくりと歩いてきた。  
潮風が少し冷たい。

すぐそばに気配がした。

「(…何処から来ん、何処へか去らん…)」

懐かしい『声』。

「おかえり、兄さん。久しぶりだね、本当に」  
「殉。元気そうだな」

杖を持つのと反対の手がしっかりと握られた。  
力強く、カサカサと乾いた、でも暖かい手。

「今度は随分、長かったね。何処へ行ってたの？」  
「中東」

ボソリと殉の兄が呟いた。

兄の心の中に異国の言葉が渦巻いているのを殉は聞いた。

その多くが苦悶の叫びであることに気付いた彼は、微かに眉をしかめて言った。

「また戦いに行ってきたんだね。人が、いっぱい死んだんだ」

「今度の戦いはキツかった、色々、な」

手をもたれろと顔を触らせられた。

殉が息を呑んだ。

「右目をなくした。あと一つでお前と同じだ」

「烈にいさん…」

離れたベンチで居眠りをしていた男が、帽子の隙間から二人の方をじっと見ていた。

柴田だった。

◇

病院から駅までの道のりは、住宅街を抜けてしまうとちょっとした田園風景となる。  
気恥ずかしさを引きずりながら、その道を銀さんは歩いていた。

隣を静々と進む和服の女性を見る、たったそれだけの事に気力を振り絞らなければならない自分が情けなかった。

「ありがとう、送ってくれて。まだ夕暮れどきだけど、ひとり歩きするにはチョットさみしい道だし。助かったわ」  
「タクシー来るまで待ってりゃいいじゃねえか、歩くなんてらしくないぜ」  
「うん、なんとなく、ね」

軽く笑いながら紗季子が銀さんを見る。  
顔に血が昇ってくるのを感じて、彼はますます不機嫌になった。

クソッ！ ガキじゃねえんだぞ

「このあいだはゴメンナサイ。頭を打ったせいだと判っているけど、あの日、玄関に立っていた貴方を見た時、わたし…」  
「よせよ。お前は夢中だったんだ。娘を助けたい一心で目の前の俺にすがりついた。それだけさ。お前は母親なんだよ。加夏子ちゃんの」

クシャクシャのピースに火をつけると、大きく吸い込んで煙を空に吹き上げた。

「旦那とはちゃんと打ち合わせしたようだな。ドンピシャのタイミングだったぜ」  
「え？」

紗季子が驚いて足を止めた。

「えってお前、俺が病院に待機してるって旦那に聞いてたんじゃないのか？」  
「あの時はとっさに…お医者には前は何も出来なかったし…それでわたし、貴方の名前を…」  
「それじゃあ」

思わず銀さんも正面から紗季子を見た。

景色の一部と化したかのように静止した男と女の間を、夜の気配を含んだ風が渡ってゆく。  
細い糸を手繰るように、二つの影が一步を…

♪チャラチャンチャン、チャラララチャンチャン～

安物の合成音で「唐獅子牡丹」のメロディーが鳴り響いた。  
舌打ちした銀さんが携帯電話を取り出し耳に当てた。一瞬で顔つきが変わる。

「どうしたの？」

紗季子が心配そうに訊ねた。

「小児病棟の患者が一人、見当たらないそうだ。今、職員総出で捜してる。俺も行かなきゃ」

言うなり今来た道を走り出した。

「久我さん！」

「すまねえ！ 駅まではすぐだ、じゃあな！！」

どんどん遠ざかる後ろ姿に、紗季子が小さく、あんた…と呟いた。

◇

息せき切って門をくぐった銀さんの目に白衣を着た仲間の姿が飛び込んできた。

「おいサブ！ いなくなったのは誰なんだ！？」

「銀さん、どこほつつき歩いてたんですか？ もうてんやわんやで大騒ぎ…」

「んな事ぁ見れば判るわ！ だれだと聞いているんじゃねえか！！」

喧嘩でも売るような勢いで、銀さんは一番近くにいた若者の白衣の胸倉をむんずと締め上げた。

「はやく言わんかい！！」

「そっそれがグエ…みどりちゃんですよ…片腕のグエエ〜…」

「なんだと」

目を白黒させて半死半生になっている若者の言葉を聞いた銀さんの顔色が、同じ位青くなった。

あの子が勝手に何処かへ行ってしまいう訳がない

病室でも、もっと小さな子の面倒や身の周りの世話を焼いているあの子には、ハンデを負っている自分達の立場が外の世界でいかに弱く脆いものかという事が良く判っていた筈だ

何かがあったのだ

何か非常な事が

ふと思立ち、銀さんは襟に食い込ませた手を離して病棟の方へと走りだした。

「どこ行くんですかぁ〜…ゲホゲホ」

恐怖の首締めからやっと解放された若者が、ほうほうのていで声を掛けた。

ナースステーション！

銀さんの声が響き、遠ざかる。

◇

東京駅。17:30発岡山行き新幹線の車内。

少し不安気な顔をした佐野碧が窓側の椅子に座っていた。

「ねえ、ほんとにいいの？ 病院抜け出しちゃって。いくら大人と一緒にだからって、ウチやっぱりよくないと思うよ、こういうの」

「大丈夫。せんせいや病院のひとには、おねえちゃんからちゃんと伝えてあるから。あなたは何も心配しなくていいのよ」

「でも」

碧は隣の女の顔を見上げた。

彼女の頭の中には、意味の判らない様々な『声』が渦を巻いていた。

あのひと…とか、病気が…とか、好き…とか、嫌とか

「さあ、もう出るわよ」

「うん…」

藍色のスーツに身を包んだ衣笠恵美子が、碧の肩にサマーセーターをかけて中身の無い片袖を隠した。